

史 談

2012 (H24) 6・20

■ 24年度の総会、開かれる

去る6月2日、中央公民館で総会が開かれました。当日は岡田教育長からごあいさつをいただいたほか、議事として23年度の事業報告と決算の承認、24年度の事業計画と予算の承認、更に役員の改選がありました。総会後は、「大正時代の荒砥町と佐藤家」について佐藤京一氏からお話を伺いました。



■ ごあいさつ

丸川二男

このたび、思いもかけない事ながら当会の会長職を引継ぐことになりました。入会してからまだ日が浅く、会の運営についてはわからないことばかりですが、会員各位のご協力のもとに役目を果たしたいと思っています。

今年は置賜33観音が開帳されているのに合わせて事業を計画しています。この機会にぜひ参加して地元の観音様に接してください。

他の役員ともどもよろしくお願いいたします。

■ 新役員紹介 (平成24～25年度)

会長	丸川二男
副会長	平吹利数・守谷英一
幹事	齋藤幸村・江口俊雄・佐藤京一 金田茂也・宮本晶朗・小杉もり子 菊地はる子・竹田伊智子
監事	小杉もり子・小形清子

会計	竹田伊智子
事務局長	守谷英一
事務局員	宮本晶朗
事務局	高橋・竹田(教育委員会)

以上です。よろしくお願いいたします。

なお、荒川幸一氏は名誉会員、前会長の江口儀雄氏は顧問になっていただきました。

■ 火の記憶 2 江口儀雄

『江戸年中行事図聚』(三谷一馬)の「左義長」の項には、「十四、十五日には、貧家の男の子たちが、藁笥の両端に竹をつけて四人で担いでやって来ます。口ぐちに『おえんさん(御家さん=おかみさんのこと)、だんなさん、しめなわくだんせ、とんどへあげる』と言いながら町の家々を廻り、門松や注連縄をもらいました」とあるが、この辺でも、門松やお札をもらう時の口上があったと思われる。

平田では元日の朝はいろりの火箸をきれいに洗ってから使用する。これを火箸洗いといい、三ケ日と、十一日、十五日、十六日、十八日にも行う。元日のいろりに火を焚くには、塩水を振って炉を清めてから豆殻を焚き付けにして火を燃やすという。

人々は長い間いろりの火を囲んで生活を営んできた。そこは家族生活の中心であり、家族外の人との交際の際でもあった。火そのものが神聖であり、いろりを取り囲む場所にも深い意味もあった。家長の座る場所は横座といい、ここにだけ敷物を横に敷かれた権威のある場所であった。土間から最も離れた位置にあり、神棚仏壇が横に見え、米を持ってくる者、家族を養う人が座るのである。この席に主人以外に座る者は、「猫、馬鹿、坊主」と言われた。横座に次ぐ席は嬬座カカザといい、主婦の席であった。嫁が姑からシャモジを渡され、主婦権が譲られると、ここに座った。食物を分配する役を担っており、ナベザ、タナモト、カッテモトなどとも呼ばれた。

横座の隣の入口に近い座席は客座で、外来の客の席である。普段は主人以外の男の席となった。横座の対面の席は木尻と呼ばれ、下座とか末座とも言われる。嫁や使用人が座る場所で、薪をくべるため煙く、暖まることもできない。明かりがあり、暖のとれるいろり

が家族の気持ちを固く結びつけていた。長い夜長を過ごすには、家長を中心に家のこと村のことを語り、農作業の段取りを語りあう場所であった。

鈴木牧之の『北越雪譜』には雪と戦う生活を余すところなく描写されている。天保五年（一八三四）十二月二十五日までに積もった雪を計ってみるに、雪の高さ十八丈あったという。この年は近年の大雪であったとはいえ、五メートル余の雪の量を思うとただ事ではない。

白鷹では屋根の「雪下ろし」、家の周りは「雪掃き」と言うが、この地では「雪掘り」という。一度降れば一度掃う、掘らなければ家や道路を塞ぎ人の出るところもなくなる。木で作った鋤をもちい、掘り出した雪は空地の人の妨げにならない所へ山のごとく積み上げる。これを「掘揚」という。雪を始末する力がないと掘夫を傭い、幾十人の力を併せて一時に掘ってしまう。次に来る大雪にそなえ一気に終すのである。時に、雪掘りに体力を尽くし、金を費やし、一日かけたのに、また大雪が降って夜が明けてみると元のものであった。主人も下人も頭をたれて歎息をつくのみという。雪降るたびに掘るので「一番掘」「二番掘」という。秋山には夜具というものはなく、炉に大火を焚き、着の身着のまま横になる。寒さが厳しければ吠に入っで眠る。妻のいる者は吠を広く作って夫婦が一枚の吠に入っで眠る。

小正月の行事として、飯豊町では夫婦ですりこ木とすり鉢をもって、素っ裸で炉の周りを三回まわった。小国では夫婦が裸で四つんばいになって炉の周りを回って、まず夫が「粟穂が割れた」といえば、それに答えて妻が「粟穂が下がった」と言いながら三回まわったという。

宮城県栗原郡一迫町長崎では当主が「どこで年取っぺや」といいながら家のまわりを廻ると、おかみさんが「どうぞ、入って取らえん」といって招き入れる。それからイロリで火をどんどん燃やし、夫婦が真っ裸になり、亭主は四つん這いになって男根を振りながら、「粟穂も稗穂もこのとおりに」と唱えて炉端をまわる。その後を女房も四つん這いになって、片手で女陰を叩きながら、「割れた割れた、突入って割れた」と唱えて三度廻る。かつての各地の小正月行事の夫婦の姿に

は、豊作祈願である夫婦和合、無病息災、子孫繁栄、家運長久の願いを見ることができる。

煮炊きする火は火打石で点けた別火を使い、飯豊山に登る時は中火、出羽三山に登る時は上火の炉を使った。高島ではお盆の迎え火を下火と呼ぶという。お山詣りの「上火」「中火」と、迎え火の「下火」がどのようにつながるかわからないが、そこには祖霊信仰があると思われる。

このあたりでも、かつては男子が十五才になると湯殿山詣りをするのがならわしであった。それは子供から大人になる時の大事な儀式でもあり、お山詣りしない者は一人前の男として認められなかった。夜中三時に出発して、黒鴨→日影→茎の峰→萱野→木川→山毛榉峠→古寺→地藏峠→大井沢→志津で一泊した。翌日は、志津から山に入り玄海を登った。湯殿山は女人禁制の山であり、女性はここまでしか登れなかった。石跳川にはごろごろした大きな石がころがっており、その石の上を歩きながら登っていくと姥ヶ岳に着く。そこから絶壁を鉄梯子につたって降りると、そこに湯殿山本殿がある。まだ身体も出来上がっていない少年には厳しい体験となるが、一人前となった自信と人間としての芯の強さのようなものが身についたという。

湯殿山の祭日は八月八日で、講でお祭りをした。山の持つ大量の水は作物の豊穰を約束してくれた。また、養蚕の神としても信仰された。

江戸中期、大井沢の大日寺の参詣者は年一万人を数え、「湯殿まで笠の波打つ大井沢」と歌われた。貞享四年（一六八七）七月、江戸誕生院より二百八十貫目の巨鐘が大勢の信者連によって引き継がれ大井沢の大日寺に納められたという。「一引き引けば我が身の為 二引き引けば我が子の為 三引き引けば先祖代々の為」と書いた職を立て、「南無六根清浄 お山繁盛」と称え、法螺貝を吹きながら大井沢に向かった。

この鐘は江戸の大勢の信者達、特に遊女達が我を競って金の簪を奉納した鐘であった。打てばまことに哀調を帯び、諸行無常の響きを深山溪谷にこだまして湯殿山、月山まで届いたといわれている。神仏分離令でその鐘は米沢で時の鐘として使われ、ついには戦時中に供出されてしまった。

四つ足のものを煮たり焼いたりする火は家の中の

火がけがれるから別に火をおこし、お産の時も同じく別火にした。不浄なために日常使っている火と別にしたと考えられている。だが、切り火を切って別に火をおこすのは神聖な火であり、産室を清浄にし、お産が無事に済むことを願ったものであろう。

■ 鷹山歴史散歩 1 竹田伊智子

(これは鷹山地区公民館の館報297号から307号に掲載されたものを再構成したものです。)

1 一丈塔婆

1794年5月27日、中山番所を焼き払う事件があった。村のみんなで起こした事件だったが、首謀者は円蔵一人に仕立て、中山並松の原で火あぶりの刑にされた。そこで、処刑前に高さ一丈(約3m)の供養塔を建ててほしいと言われたので、村のみんなは建てる約束をした。

しかし、なかなか一丈の石が見つけれず、立てば一丈になる地藏様を中山寺の山門の側に建てたが、村の中に不審火がなくならず、村の人たちは、円蔵さんとの約束を守らない祟りでないかと恐れた。

それから約90年もたった1884年頃、あるおばあさんが石のあるところの夢をみた。その場所を掘ったら夢のとおり石が出てきた。それが中山寺にある一丈塔婆の石で、不思議なことにそれからは不審火もなくなったということである。石が出たところは中山小学校の上で、今はパラグライダーの着地点になっている。中山地区では今でも毎年、春には中山寺で行われる「お大般若」の時に円蔵の血族の方と一緒に供養している。



2 大蔵寺

白鷹山は天平2年(730年)役の行者の開山で、

寺は以前、小滝(南陽市)にあったといわれ、今から486年前の大永2年(1523年)荒砥館将(大立目氏)の帰依により、現在地の滝野に移転した古い記録は伝えている。

大蔵寺は昔から白鷹山の別当で、上杉家のために新年や事あるごとに祈祷し、祈祷札を差し上げる格式を持っていた。また、歴代の藩主が白鷹山登拝の折には必ず休憩の場とされたという。

なお、境内の虚空蔵尊は山頂の分霊をまつり、容易に参詣できる「下虚空蔵」と呼ばれて、広く地域からしたまわれている。

虚空蔵尊は大同2年(808年)行基の作で、日本五大虚空蔵のひとつといわれ、お堂の正面の額は、1775年に上杉鷹山が25歳の時に登拝された際に書かれた直筆の扁額である。

3 阿弥陀如来堂

慶長3年(1598年)直江兼続が萩野に安部長六他5、6軒を移住させ、のちに、移住した小川平六が持参した親鸞聖人直筆の巻物をご本尊として祭られている御堂である。

二回の火事にあつたが、ご本尊は飛んで高い柿の木に引っかかり不思議と難を逃れ、その後はますます小川一族の守り神となつたらしい。小川家は400年あまりで枝葉が広がり、現在、萩野に住んでいるのは23軒である。

今でも年に一度、8月16日には皆が集まり、旗を立てて阿弥陀様の供養を行い、先祖を偲んでいる。只、昔から「この巻物を見ると目がつぶれる」という言い伝えがあり、見た人はいないという。

場所は萩野の新屋敷、小川忠徳さんの屋敷内に祭られている。尚、安部家は西町内の天神様、紺野家は南町内の大日堂をそれぞれの守り神として祭つたとの記録がある。年月がたつうちに広く村中で祭るようになったとのことである。

4 嶽山三十三観音

白鷹スキー場の右脇の山を地区の人は嶽山(たけのやま)と呼んでいる。三十三観音はこの山のわずかな広さの斜面にある。約150年前に建立されたもので、

このうちの1番と2番は、山の登り口の小六清水（ころくすず）の脇に並んで建っている。残りの31体と地蔵様は山の斜面に点在しているという、ちょっと神秘的な空間である。

この観音様は、すべて山形市の石工によって掘られて、運ばれたものである。その時の世話役にいただいたと伝えられている石仏が、中山の布施仁（まさし）さん宅にある。子どもを抱いた観音像で床の間に家宝としてかざってある。裏には、安政四年（1857年）に4代目にあたる孫が亡くなった供養と平和を願い建立したと書かれている。



時がたってスキー場ができたころから「中山地区の宝にしたい」との声があがり、昭和57年7月に「三十三観音奉賛会」を結成し、観音まつりを地区を挙げて行うことになった。おまつりは暦で小満の5月21日ごろだったが、現在は7月はじめの日曜日となり、草刈りの奉仕作業の後にお祭りを行っている。

5 抱石（たがき石）

『今昔物語』の中には、数多くの生きている道端の石の話があるが、滝野の折居の中には、俗称「抱石（たがき石）」というところがある。

そこには大きさ55cm、重さ86kg程度の花崗岩の石があり、年代は不詳だが宝暦年間の古文書にも出てくるから往古よりあったものと思われる。この石は昔から若い衆の力だめしの石と伝えられ、古老の話では「年内に折居の中を、休まずにかついで一巡する者が三人おれば折居に異変がある」と言われてきたという。

この石は米・藪の相場にも用いられ、石が定位置よ

りも上折居に捨て置かれれば相場は上がり、下の方に置かれれば相場が下がると言われてきた。若い衆が力尽きて途中で投げ捨てても、いつとはなしに定位置に帰ってくることから、そのあたりは「たがき石」ともいわれている。



また、杉沢のある人が自分の家の石垣積みの最中に、格好のいいこの石を夜にこっそりと運び、家の石垣の中段に積んだところ、完成間じかになってこの石の上の方が一夜にしてくずれ落ち、また積んでもくずれ落ちるので不思議に思い、石のたたりでないかと思って酒一升を添えて夜にこっそり返しに来たという話も伝わっている。（続く）

■ **今年度の研究発表会**が開かれます。日時は6月30日（土）午後2時から。場所は中央公民館。「野仏に秘められたもの」をテーマにして、講師には当会の平吹利数氏です。多数ご参加ください。

■ **置賜民俗学会の研究集会**が開催されます。今回は「草木塔の心をさぐる」をテーマに、7月1日（日）、場所はホテルサンルート米沢で午後2時から。シンポジウムには当会の守谷英一氏もパネリストとして出席します。参加は無料ですが、6月25日まで申し込みが必要。TEL 84-7172（嶋貫）まで。

■ 「**鮎貝の歴史を語る会**」では今年度も「年表で見る鮎貝の歴史」や「村長日誌を読む」など、様々な事業を計画しています。気軽に参加して史談会との交流も深めてください。連絡は小杉まで。

■ 先に「**あゆむ**」で行われた「**塩田行屋の仏たち**」の展示をまとめたものが、このたび東北芸術工大から発行された『**紀要**』に掲載されています。町の図書館にありますのでご覧ください。執筆には当会員の宮本品朗氏などがあたっています。